

米本空襲 八千代市

東京成徳大学空襲研究会

東京の方からB29が —桜井さんの体験—

「私のおばさんとその人の妹が遊びに来ていた訳ね、隣同士だから。」

「そうしたら10回くらい空襲警報のサイレンがウーって鳴って、東京からの高射砲がドーンドーンって打つのが聞こえるわけ、米本はいても。」

「それならね、東京の方の空から9種が3機ずつでこう来たんですよ、『ああB29だ』って、それなら私のおばちゃんが自分の妹を私と私の姐と間違えて防空壕へ引っ張り込んでいっちゃった。」

「そして竹藪の向こうから爆弾、真っ黒いのが回るように落ちてきたんですよ、それを私が見たんです。」

「取り残された私は寝てたにね、学校で訓練して知っていた目と鼻を擦ることを教えて、井戸屋形っていうところに行って『伏せしろ』って命令したんだよね。」

「うちのおばあちゃんが、私と寝っ子がそばにいないから、子どもがどうしちゃったんだろうって思って、井戸のそばで伏せている私達に向かって『そんなところから死んじゃうよ！』って大きい声で言われて。」

「その時にはもうすでに家裏に爆弾が『バーン』って落ちこちっちゃったのよ、それを見たら、こら上がったの。」

「そうしたらもう庭にも爆弾の破片がいっぱい転がっていた。」

「おめえ、生きていたのか」 —小倉さんの体験—

「私は高等2年(現在の中学2年)でね、ちょうどその日学校にいたの。」

「順番っていう順番があって、みんな(クラスメイト)は帰っちゃうんだけど、私も(順番の順番)は学校に残っていたの。」

「それら爆弾が落ちてきてねえ、うちの親たちは私が順番で残っていることを知らないから、その時すぐに帰ってこなかったのをつきり学校に爆弾が落ちたせいだと思って、『うちのタミが死んじゃった』なんて言っただけだよ。」

「父親は『なんだ、おめえ、死んだかと思っていら生きていたのか』って言われたよ、『良かったな』って。」

「でね、私が中学から帰ってくる間に、疎開して来た人が爆弾で亡くなって置かれていた。」

「何か被せてもなくてただ寝ていただけね、何で畑に寝かされてあるのかとびっくりしますよ、腰抜けちゃったよ、本当に。」

「誰か1人か2人、亡くなっていたんだよ、だけど(遺体は)残っていないから、寝かなくて亡くなっていることが分かっていからね。もう、すぐ帰っちゃおうよ、畑の裏のほうをずっと通って帰って、まあねえ、戦争はやだねえ……。」

2つの爆弾 —鈴木さんの体験—

「当時私は内宿で、おばあちゃん一人と子供たちで、十人くらいで遊んでいました。」

「道の真ん中に爆弾が落ちたんです、本当に目の前に落ちました。砂を道から遊びながら、何が何かわからなくて夢中ですぐそばにある木小屋の中に背で大きくで潜ったんですよ。」

「音の道は石やなんかが入ってないから、砂利や石が飛び散らなかった。そのおかげでそこでは誰も怪我をしませんでした。」

「落ちた爆弾の穴は中宿よりずっと小さかった。小型爆弾が何か落ちたのね、実家に落ちたような大きな爆弾だったらそれこそみんな死んでいたんじゃないの。」

「落ち着いてから家へ戻るのにも怖くなっていました。」

「何も無い状態で、全部吹っ飛んでました、自分の奥にある釜が転がっただけで、あとは何もないんですよ。」

「で、風呂場(当時は別の建物だった)に逃げ込んでいた父親が、壁で顔を真っ黒にして、軒下で目だけきよるよろしてました、『なんだい！なんだい！なんだい！』って。」

「うちが濡れちゃってからびっしょりしてたよ。」

米本空襲の被害図

戦後70年で地図を使い、調査されている範囲での米本空襲の被害状況を示した被害図。犠牲者の安否だけでなく、インフラと一歩行った体験者も調査する地点も示した。

